

シマゴマ *Luscinia sibilans* の鹿児島県本土初記録

加藤 銀次

First Record of Rufous-Tailed Robin *Luscinia sibilans* at the Mainland of Kagoshima Prefecture

Ginji KATO

はじめに

鹿児島県南さつま市笠沙町は薩摩半島南西部に位置し、全域が東シナ海に面した半島状の地形となっている。笠石川河口の左岸から野間岬を経て坊津町に至るまでの海岸線はリアス海岸となっており、複雑な地形を形成している。東に隣接する大浦町との間には大浦干拓がある。また、町内には中央部の野間岳（591m）をはじめ低山が多く分布し、高低差が激しい。西に突き出た地形で、春秋に渡り鳥が数多く飛来することが知られている。

今回、筆者らは南さつま市笠沙町にてシマゴマ *Luscinia sibilans*（以下、本種）と考えられる小型鳥類1個体（以下、本個体）を観察・撮影した。後に詳述するが、本種の鹿児島県内における記録は少なく、県本土では初と考えられる貴重な記録であるため、ここに報告する。

1 観察者

加藤銀次、加藤卯月、大山芳晴、大山節子

2 観察日・場所

2020年5月7日、鹿児島県南さつま市笠沙町赤生木（31° 39'55"N, 130° 20'16"E）にて観察。

3 観察距離

約10メートルの距離。目視にて観察し、望遠レンズを装着した一眼レフカメラを用いて撮影した。

4 観察した環境

本個体が見られたのは南さつま市笠沙町の集落内にある、民家や畑に隣接したマダケ *Phyllostachys bambusoides* で構成された竹藪である。本個体を発

見した午前7時30分頃から日中にかけては竹藪内で行動していたが、日没後には竹藪付近の水溜まりにも現れた。いずれも日の当たらない薄暗い環境であった。

5 形態に関する記述

本個体はスズメ *Passer montanus* より小さく、寸詰まりの体型で跗蹠が長く、コマドリ *Luscinia akahige* に似た形態であった（図1）。額から尾にかけての体上面は褐色で、上尾筒と尾羽は赤みがあった（図1）。喉以下の体下面は白っぽく、褐色で明瞭な鱗模様が認められた（図2）。顔には眼より前方に不明瞭な淡色の眉斑があり、アイリングも淡色であった（図1）。大雨覆と三列風切の先端には不明瞭な淡色の斑があった（図1）。嘴は黒く、脚は肉色であった（図1）。

大きさや体型から本個体はノゴマ属 *Luscinia* の1種であると考えられる。ノゴマ属で全体的に羽色が褐色であるのはノゴマ *L. calliope*、コルリ *L. cyane* のそれぞれ雌とシマゴマである（真木ら、2014；五百澤・山形、2014）。これらのうち、ノゴマ雌は体下面の鱗模様が不明瞭で、白い眉斑と顎線が明瞭であるため該当しない（真木ら、2014；五百澤・山形、2014）。コルリ雌は体下面の鱗模様がはっきりせず、眉斑はないため本個体の特徴と一致しない（真木ら、2014；五百澤・山形、2014）。残るシマゴマは体下面の明瞭な鱗模様、不明瞭な眉斑、尾上面の赤みなど各特長が一致している（真木ら、2014；五百澤・山形、2014）。以上により、本個体はシマゴマであると判断した。

本種の幼羽では、大雨覆と三列風切の先端に淡色斑が見られることが多く、尾羽は先端が細く尖る

(今野ら, 2013)。図1より本個体は大雨覆と三列風切の先端にわずかに淡色斑が見られ、尾羽が先細りする形状である。これらは幼羽の特徴に一致している。今野ら(2013)は、大雨覆の斑には個体差があるため、この点のみで齢の判定を行うのは適切でないと述べているが、本個体は尾羽の形状も幼羽を示唆しているため、第1回夏羽と判断して良いと思われる。また、今野ら(2013)は、本種は外見からの性の判定が困難であるとしているため、本個体の性は判断できなかった。



図1 笠沙町で観察されたシマゴマ

寸詰まりの体型で跗蹠は長い。大雨覆と三列風切の先端に淡色斑が見られる。尾羽の先端は細く尖る。



図2 シマゴマの側面観

体下面に褐色の鱗模様を確認できる。

6 観察した行動

発見者は午前7時30分ごろ、さえずりによって本個体に気付いた。発見当初は竹藪の中で「ヒンルルルル…」という声で盛んにさえずっていた。午前8時頃からは鳴く頻度が低くなり、午前10時を過ぎてから鳴き声は聞かれなくなった。また、さえずりの合間に時折高く鋭い「ツー」という地鳴きも発していた。さえずりはコマドリやコルリに似るが声量

が小さく、尻下がりであることから区別できた (Brazil, 2009; 高木ら, 2015)。さらに、「バードリサーチ 鳴き声図鑑 (https://www.bird-research.jp/1_shiryo/nakigoe.html)」や「xeno-canto (<https://www.xeno-canto.org>)」等のインターネットサイトにおいて公開されている本種の鳴き声に一致していた。

本個体は滞在中、ほとんど竹藪の中で過ごしていたが、さえずりが確認された時間帯には開けた場所に姿を現すことがあった。日没後にも姿を確認でき、竹藪の脇にある水溜まりで水浴びしている様子を観察した。

7 考察

本種は、エニセイ川からオホーツク海にかけてのタイガ地帯及びカムチャツカ半島・サハリン・千島列島南部で繁殖し、中国南東部・東南アジアで越冬する (Brazil, 2009)。日本では春に九州北西部や日本海側の地域を普通通過しているが、九州南部以南における記録はわずかしかない (高木, 2019)。鹿児島県内では十島村平島で2008年4月20日に2個体が初めて記録された (川辺・所崎, 2014; 関ら, 2011)。その後、同島で2012年4月28日、2013年5月15日、2014年5月2日にそれぞれ1個体が記録されている (川辺・所崎, 2014; 宮島仁 私信)。今回の記録は県内5例目となり、県本土における初記録と考えられる。

シマゴマは、九州近辺と中国東部を結ぶルートを利用して飛来していると考えられるが、九州南部以南における記録が少ないことから、同ルートの北側だけを利用していると思われる (高木, 2019)。そのため、離島を含め本県は本種の主な渡りのルートからは外れている。ただし、九州北西部での飛来状況と地理的条件、笠沙町で記録されたことを考慮すると、県本土の東シナ海に面した地域や甌島列島などには毎年一定数が飛来していると推測される。本種は密集した草木や藪を好むため (Brazil, 2009; 高木ら, 2015)、野外で姿を見ることは難しい。そのため、これらの地域ではこれまで飛来していても発見されていなかった可能性がある。前述の通り、本個体はさえずりによって発見された。本種は潜行性が強いが、さえずりは発見や識別に有効であると考えられる。

8 謝辞

執筆にあたり、所崎聡氏には全般にわたって助言を頂いた。また、宮島仁氏には過去の記録について情報を頂いた。この場を借りてお礼申し上げます。

引用文献

Brazil M (2009) *Birds of East Asia* : 418-419, Christopher Helm, London.

今野怜・村上速雄・松尾武芳(2013)ハリン日露共同標識調査で得たシマゴマ *Luscinia sibilans*, ムジセツカ *Phylloscopus fuscatus*, カラフトムジセツカ *Phylloscopus schwarzi* に関する知見. 鳥類標識協会誌 vol, 25(2) :65-76.

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸(2014) 新訂 日本の鳥550 山野の鳥 :265-267, 文一総合出版, 東京.

川辺洪・所崎聡(2014) 鹿児島県におけるシマゴマ *Luscinia sibilans* の記録. 「るりかけす」鹿児島 (143) :10-11.

真木広造・大西敏一・五百澤日丸(2014) 日本の野鳥 650 :614-617, 平凡社, 東京.

関伸一・所崎聡・溝口文男・高木慎介・仲村昇・ファーガスクリスタル(2011) トカラ列島の鳥類相. 森林総合研究所研究報告 vol, 10(4) :183 - 229

高木慎介(2019) 日本のフライウェイ07 九州近辺と中国東部を結ぶルート. 日本の渡り鳥ガイド :46-47, 文一総合出版, 東京.

高木慎介・小田谷嘉弥・先崎理之・原星一(2015) 小型ツグミカタログ. *Birder* (1) : 6-15.

